

## 特集 2

### 学ぶ×働く移民女性たち 報告 3 学ぶことは生き延びること

戒香里菜

フィリピン出身。2001 年来日。夜間中学を経て定時制高校卒、専門学校で学ぶとともに、NGO「外国人救援ネット」のタガログ語通訳

#### フィリピンでの生活

皆さんこんにちは。私は、フィリピンの過去を語るといつも胸がきゅっとなります。私は小さい頃から母親と父親がいなくて、私の記憶の中には、私が小学校あがる前のお母さんの記憶しかなくて、私は虐待のことしか覚えていません。私の体はあざだらけで、いつも叩かれたり、頭を殴られたりしていました。お母さんは酒飲みでした。私は 3 人姉妹です。私が一番上で、よく私が怒られたり叩かれたりしていました。お母さんはいつも家にいなくて朝からどこかに出かけていました。

小学校一年生になった頃に、私はおばあちゃんのところに預けられて、お母さんの姿を見なくなりました。私と妹 2 人でなく、おばあちゃんのところには他のいとこもいたので、私たち全員が生活するのは大変でした。たしかいところが 10 人ぐらい集まっていた。おばあちゃんには子どもが 13 人いたので、孫だけでも数えると多分 100 人ぐらいいる大家族です。そんな中で妹 2 人のことを考えると、本当に、私が妹を支えなければいけなくて、野菜を売り歩いたりしました。おばあちゃんだけだと生活を支えるのが難しくて、自分がどうやって生きていくかが問題でした。その頃には、おばあちゃんが再婚したおじいちゃんに、私が性的虐待を受けて、そこから親戚をたらい回しにされて、本当に大変な人生でした。生きていくだけでも精一杯でした。

10 代になると、親がいなくて、誰のことでも信頼してしまうんですよ。男性でも信頼してしまうので、自分が危険に遭うことが 10 代の私にはわかっていませんでした。10 代で妊娠し、フィリピンでは中絶は許されないけれど、相手の男性はどこか行ってしまう。フィリピンで今でもよくあることなんですけど、10 代で妊娠して子どもを産まないといけないのも大変でした。どうしても生活のために男性を信頼してしまうから、子どもが 2 人できてしまって、結局 2 人とも父親がいなまま、私が育てていくことになりました。

#### 日本での仕事

そんな私に、遠い親戚が、「あんたはこんな人生になっているんだから、人生変えないといけないでしょ。日本に行けば」と。「日本の車の工場で働けば 30 万も稼げるから、大金

持ちになれるよ」と甘い言葉で私を誘いました。それだったら私も子どもを2人育てていけるなって。それで、私はその話に乗りました。でも、私はパスポートを持っていないのに、どうやって日本に行けるのか不思議に思いました。でも、子どもが2人もいて、本当に生活がかかっているから、また信用するしかなかったです。2001年9月に、日本人の社長さんに会いました。タガログ語と英語を混ぜながら話せる方で、「あなたなら大丈夫。日本に来たら」って。その社長さんに会ったのが9月2日なのですが、9月20日に日本に来れるよって。「ちょっと待ってください、私まだパスポートないんですけど」と言うと、「大丈夫です、来週この事務所に来なさい。これ2万円」と。2万円もらって嬉しくて、私は怖いもの知らずで話に乗ってしまいました。その言われた事務所ではなく、マニラにあるデパートで待ち合わせて、そこで写真を撮りました。そしたら次の日に、「パスポート、できました」と。こんなに簡単にできるんだ、と驚きました。私の写真が貼ってあるのですが、山下メリアンという名前でした。そこに日本人の配偶者と書かれているんです。本当にこれでいけるのかなと怖くなりました。だけど、2人の男性が、日本に行くまで見張り役で、マニラ空港に連れていかれました。マニラ空港から決まったルートを指示されました。指示された窓口を通りなさいって。何番から何番と指示されて、そこだけと言われました。私の姿はガラス張りの壁から見張り役に見えていて、ずっと見張っていました。「ここだ」って指差されて、なんとか通り抜けました。すごく怖かったですが、でもこれは逃げられないなって。逃げることもできないし、私はその2人の男性が怖くて、でもこのまま信じるしかないな、行くしかないなって。マニラ空港で、出国管理か税関かどちらかわからないけれど、「パスポート見せてください」と言われて、多分、私がドキドキして怖くて、そんな姿に見えたのかと思ったのですが、グルだったみたいで、パスポート見ただけで「あ、向こうです」ってゲートまで案内してくれました。

日本に到着して、成田空港でパスポートにスタンプを押してもらい入国すると、日本人が2人迎えに来ていました。成田空港から移動して、どこにいるのかわかりませんでした。空港に迎えに来た社長さんが、私は車の工場ではなくて、どこかのラウンジで働くということになっていて、話が違ふと気が付いたけれど、親戚は「もう50万円払ったんだから、日本で働くしかない」と。結局、働いたのですが、9月から2月まで全然給料がもらえなくて、日本語がわからないから、コミュニケーションを取ろうとしても「フィリピン帰れ」とか、そういうことを言われても、私はパスポートを取られていたので帰れませんでした。結局、別のフィリピン人がそのパスポートをもう一回使って来日したことがわかりました。そういう手口だったんだと、後からわかりました。

## 脱出

ヤクザのグループだったんですけど、そのヤクザの親分が、私たちがラウンジで人気がなくなると売春させると聞いて、私はそこで決心しました。私たちは身分証明書もなく、

いつ殺されるかもわからないから、売春させられる前に逃げるしかない。本当に何も持たずに、いつもの迎いの男性が来る時間の前にエレベーターではなくてマンションの8階から階段を走って降りて、でも本当に行き先がわからなかった。でも私の命を賭けるしかないから、社長の友だちにお願いしてありました。その友だちが私を押し入れに隠してくれて、「待ってなさい。絶対ここに社長さん来るから」って。私が押し入れの中に隠れていると、社長が大きな声で、「逃げた」「She escaped!」って英語で言っているのが聞こえて、ものすごく怖くて、どうしよう、どうしようって。友だちが、「わかった。もしここに来たら報告します」というのを聞いて、安心しました。

その友だちが頼んでくれた人が、私を車のトランクに入れてくれました。名古屋の入管に移動するように言われたのですが、移動している間、本当に息苦しかったです。それでも命が助かるなら我慢できるんですよ。入管に行ったんですけど、私の場合は身分証明書もパスポートもないから強制送還はできないと言われました。「じゃあ私はどうしたらいいんですか、命に関わることで、怖いんです。逮捕してください。牢屋に入った方が安心です」とお願いしても、「あなたは出頭したんだから、逮捕することはできない」と言われました。

入管にも留置所に入れてもらえず、フィリピンの友だちに連絡しました。当時は今みたいに私たち外国人のために活躍してくれているNGOなどいろいろな団体がなかったので、フィリピンに連絡して、「誰かいないですか」と助けを求めました。そうしたら、その友だちの姉が淡路島にいて、なんとか一晩だけでもそこに泊めてもらえたらという話になりました。当時は明石海峡大橋がもうできていたのですが、船があって、その船に乗らないといけなかったのですが、逃げた時にカバンの中にカップラーメンひとつとウーロン茶しかなくて、一晩は真冬の大阪城公園で過ごして、次の日に淡路島の知り合いに連絡して、「おいで」と言われました。

本当にドキドキしながら、たこフェリーという船に乗りました。私にとっては、フィリピンでは船に乗ったら2日間ぐらいはかかるんですよ。なので、その船に乗った時にも、何時間かかるんでしょうかと思いました。本当に淡路島というところにたどり着くのだろうか、本当に命が助かるのだろうか、逃げたままで私は命を狙われているのですごく怖くて、なんとかその船に乗ったら、20分くらいで着きました。びっくりしました。「え、もうここですか」って思うくらいで。20分の距離でも日本では船に乗るんだ、と、考えながらやっと淡路島にたどり着きました。

そこで一晩は泊めてもらって、フィリピン大使館と連絡をとって、どうすれば自分がフィリピン人である証明書を発行してもらえるのか、トラベリングドキュメントはいくらかかるのかをききました。1万円だと言われたのですが、私は一銭も持っていないので、なんとか無料で発行してもらえないかとお願いしたのですが、フィリピン大使館の返事は「どこかで働きなさい」でした。すごくショックでした。ビザもパスポートもない私がどうや

って仕事できるの。入管にも書類をもらった特に、「あなたは働いてはいけないよ」と言われたにもかかわらず、です。

### 流し台の下が一番安心な場所だった日々

私はこれからどうしたらいいんでしょう。フィリピン大使館にも助けてもらえず、淡路島の知り合いに頼るしかなくて、そこでとりあえずフィリピンに帰る飛行機代と必要な書類を作るお金のために働かないといけないので、最初はスナックで週1回働き、土木の仕事もしました。そのときの土木の仕事で夫と知り合いました。知り合ってからすぐに結婚はできなかつたのですが、子どももできていて、在留特別許可が1年後におりて、やっと私はフィリピンに帰らずに、日本に滞在できるようになりました。

でも逃げてからの生活でも、トラウマはなかなか消えませんでした。その当時の私の一番安心な場所は、家の流し台の中のもの全部箱の中に入れておいて、ちょっとした音でも聞こえると、その流し台の中に隠れるんです。寝る時もずっとそこでしか眠れない状態でした。いつか誰かが私を捕まえにくる。その時は、もし誰か来て自分の命が危険になった時のために、淡路島に行く道を忘れないようにしていました。逃げる場所を作っていたんですね。そんな状態が2~3年ぐらい続きました。

### 日本に来て人生が変わった

フィリピンに残してきた2人の子どもも、「私と一緒に暮らしたい」と、夫にお願いして、日本に来ました。それからさらに2人増えました。長男が日本に来たのがちょうど小学校に入る時でした。フィリピンの話はだいぶ省略しましたが、10代の時は、覚せい剤にかかわっている人が身近にいたり、自殺未遂をしたり、困難な人生でした。

日本に来て自分の人生が変わって本当によかったと思うことがあります。息子が小学校に入学する時、私も日本語があまりわからなくて、自力で日本語を勉強しました。まずひらがなとカタカナを一番先に勉強して、それも毎日コツコツと空いている時間に勉強しました。勉強がとても好きで、短期間で私は普通に日本語の会話ができるようになって、小学校の校長先生に気に入られて、教育委員会に知らない間に申し込まれていたんですよ。急に家に電話かかってきて、「教育委員会です。面接いつ来られますか」と。何のことですかとたずねると、「子ども多文化共生サポーターの仕事があって、どこどこの小学校で仕事をするようになるんですけど、面接に来てください」ということでした。そこから私の人生は変わりました。

最初は、淡路島の洲本市立第一小学校だったのですが、そこでフィリピンの文化や料理を小学校で紹介するようになりました。いくら普通の会話や通訳が出来ても、やはり私は日本語が不十分で、その当時は難しかったです。漢字も難しく、自分にとってコンプレックスで、「この子に本当に役に立っているのか」と悩みました。そこで一番感じたのが、

私は漢字も勉強しないといけない、ということでした。当時、まだ2~3年目で私が真っ先に覚えたのは部首でした。部首を覚えると必ず漢字も意味がわかるようになると気付いて、そこから自分でコツコツと日本語の勉強をしました。

そして多文化共生サポーターの経験を生かして、自分がフィリピンで小学校も中学校にも行けなかったんですね。なので私は学校に行きたい、大人になってもおばあちゃんになっても学校に行きたいってずっと思っていたんですね。でもなかなかそういう機会も、チャンスもなく、子どもを育てて仕事しながらというのは難しかったです。でも私は本当に勉強が好きで、塾にも行って、週に1回市役所のボランティアの日本語を教えてくれる先生にも教わって、空いた時間に自分でも勉強しました。勉強が好きなので、私の趣味も勉強になりました。夜間中学校にも入学して、卒業しました。夜間中学校に入った時に、私の小さな夢はどんどん大きくなりました。私は、私と同じ境遇の人たちの力になりたいと思っています。高校に進学して卒業もしました。本当に、この日本で生活したことで、ここまできました。

### 大好きな仕事に就くために

私たち外国人の障害は、言葉なんでしょうね。「日本語がわかると嬉しい」というのが私たちの共通点だと思います。私も同じように、ちょうど妊娠していた時に漢字が読めなくて、間違っただけで違う方向のバスに乗ってしまって、「ここ違うやん、ちょっと待って待って」なんて言えなくて、そのままバスの終点まで行ってしまいました。その時はお腹も大きくて、どうやって戻るんだろうって。本当に、私たち外国人の障害は言葉です。読めないんですね。そこに私たちは最初一番苦労していました。

私は今年高校を卒業しました。私は夜間中学というものがあることを知りませんでした。6年前までは日本語を自力で勉強したり、どこかの知り合いの塾にお願いして国語の勉強をしたり、先ほどのボランティアの先生たちをお願いしたりして、日本語が上達するようにならなくて、普通の会話はできるようになりました。

でも仕事となると、私がやっていた多文化共生サポーターにしても、毎日ではないです。安定していないんです、はっきり言って。週に2~3回しかないし、お手伝いしていた生徒がフィリピンに帰ってしまうと仕事が急になくなってしまいます。そうすると、収入が急になくなってしまいます。

私は子どもが5人いて、安定しないといけないと自分で気付いていたのですが、ちょうど三男が生まれた時に、夫の仕事がなくなりました。その時に、いや、これはいけない、私がかちゃんと安定した仕事を探さないといけない、と思いました。

日本語が不十分だと気付いていて、でもハローワークに行っても仕事を探して、職業訓練でパソコン教室で3ヶ月間勉強して資格も取れたんですけど、問題なのはやはり読み書きとか、さっきも債務整理という言葉が出ましたが、専門用語になると私たち外国人にとっ

て本当に難しいです。そこにまた新たな障害があります。一度私がパソコン教室を卒業した後に、不動産会社にちゃんと職歴も書いて応募したんですけど、やっぱり採用されないんですよ。専門用語が出てくるから、あるいは漢字の読み書きがちゃんとできないと採用されないんですよ。そこが「私たち外国人ってどうやって安定した仕事ができるの」という問題の答えにつながります。勉強しないと私たちには障害がどんどん出てくるんですよ。

私も、外国人であるということだけで、賃貸住宅を借りることができませんでした。私も先月5件家を見に行つて、日本人の保証人もいるのに、結局、私が外国人であることでダメでした。それだけの理由で私は自分の選んだ家を借りることができない。そのために私の中学生の娘は3週間ぐらい学校に行けませんでした。本当に私たち外国人にはそれだけいろいろな障害があります。そのために、私もパチャラーさんと同じように勉強をつづけました。学校に通う前から、まず好きになった部首から覚えて、漢字検定3級まで取りました。漢字検定の試験を受けて、日本語検定も受けて、でもそれだけではなかなか安定した仕事を見つけることができないので、私は夜間中学校を卒業して定時制高校も卒業して、やっと安定した仕事に就けました。それも私が大好きな仕事なんです。私は今、毎日、月曜日から土曜日まで力仕事をしています。大勢の男性の中で、女ひとりで働いています。重たい仕事もやっています。昨日も生コンを扱いました。だから、もう体がゴツゴツしていて、色もこの色です。毎日現場に出て、3トン4トンのトラックも、ユンボも運転しています。

日本語の勉強をしたからこそ、私は自分のやりたい仕事に就けて、自分の夢を叶えることができたということをみんなにわかってもらいたいと思っています。男たちの世界の中に女性が入るのは、かなり難しいんです。私は2年目になるんですけど、1年目は本当にボロクソに言われるんです、毎日。女性だからって、何がお前にできるんだって。そこから男女差別が生まれているんですよ。何ができるのって、「ちょっと待ってください。私の力を試してみてください」と。なので、みんなと同じように私も重たいものを扱います。女性だからって、「いいよ、してあげるよ」、というようなそんな男性はいません。「これ、香里菜やりなさい」しか言わないんです。「そんなこともできないのか」とか。でも、その言葉も私にとっては、チャレンジです。そう言われると、男性ができることは女性にもできるということを、見せることができる。

ただ、力だけではなく、資格もそのひとつです。私は高校を卒業した後に、建築の専門学校に通つて、今、建築士の資格を取得しようとしています。ユンボの免許も取ると、やはり周りは「すごいな」って言います。「ユンボも乗れるんですか」って。今は建設業界では、トラック運転手に女性が増えてきているんですけど、力仕事になると女性が少なくて、私の職場でも20人の中で女性は私1人だけです。

この重たい仕事をしながら、私は建設専門学校に通つて、子どもを育てながら、毎朝5

時 40 分に家を出るんです。早起きしてお弁当を作って、朝ごはんと晩御飯まで用意しているんです。なぜかという、私が専門学校から帰ってくるのが 11 時ぐらいなのです。子どもたちと話せるのは、土日しかないです。でも、それだけ学ぶことがあります。私たちの子どもにも伝えることができるのではないかと思っています。だから夜、帰ってから、ヘトヘトで、根詰めながらやっています。テスト期間でも仕事の休憩時間に、ユンボの上で教科書を開いて、そこで空いてる時間しかないから、その時しか勉強できないんだけど、でも私が信じているのは、これから先自分の将来があるんだっていうのは、それだけはみんなに言えます。

皆さんに伝えたいのは、どんな困難にあっても本当に命だけは大切にしたいんです。前向きに必ず進んで行って欲しい。その自分の向く先には必ず扉と光が見えてくるので、その扉に向かって、第一歩を踏み分けて入って行くのは自分次第なので、勇気を持って扉を開くように伝えたいと思います。

また、教育に関しては、夜間中学を描いたドキュメンタリー「こんばんはⅡ」を観るとわかってもらえると思いますが、本当に私たちにとって教育というのが大切だということ、自分の子孫にも伝えたいと思っています。学び直したいと希望する多くの方々にも、学べるようになって欲しいと思っています。また、私たちは外国人と言われながら、移民もそうですが、私たちはこの日本に住んでいて、滞在していて、皆さんと一緒にこの社会で共生していて、日本社会に無関心の日本人よりも、私たちは外国人と言われても、日本の心を持っているはずです。言いたいのは、私たち外国人から税金だけを取るのではなく、私たちにも権利を、せめて選挙権だけでも与えて欲しいと思っています。みなさんありがとうございます。

(えびす かりな)